

ぬくもりを伝える

2025・11・12 重枝 一郎

私は、本校に赴任した際、「本校の強み」を語る必要があったと思った。語りたいのは「教育は人なり」の部分である。私は、自分のこれまでのキャリアの中での他校比較や、外部からの印象を捨てた。そこで行き着いたのは「生徒に寄り添う教師」という言葉であった。それからは、保護者会や学校説明会等で話す時は必ず、本校の先生たちのキャラクターを生かしつつ、「生徒に寄り添う力が素晴らしい」という語りをしている。自分のこれまでのキャリアを話し、いろいろな経験を持っていることを背景にそのことを語ることで、説得力はあると思う。一昨年までのOSでの私のプレゼンを聞いたことがあるならわかると思う。昨年から、生徒主体にするため、私の時間が短くなったので、そこまで語れていない。でも、かわりに生徒が話してくれているからそれでいい。

私は、教育者の本質は「生徒に寄り添い、ぬくもりを伝える」ことにあると考えている。下の話は、昔、ある先生から、たまたま聞いた話で、記憶から離れなかった話である。その先生は「心に響く小さな5つの物語」という本の話だと言っていた。

その先生が5年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。前年の担任の先生からの記録には、少年の悪いところばかりが記録されていた。ある時、少年の1年生からの記録が目に残った。

「朗らかで、友だち好きで、人にも親切。勉強もよくできて、将来が楽しみ」とある。

何かの間違いだ、他の子と間違えている？ 先生はそう思った。

2年生の記録には、「母親が病気で世話をしなければならず、よく遅刻をする」と書かれていた。

3年生では、「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りをする」

3年生の後半では、「母親が死亡」「暗い」

4年生では、「父親が暴力をふるう」「無気力」

先生の胸に激しい痛みが走った。ダメな子と決めつけていたが、突然深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前にいる。

その先生にとって目が開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？ わからないところがあれば教えるから」

少年は笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。

授業で少年が初めて手を挙げた時、先生に大きな喜びが沸き起こった。

少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年は小さな包みを先生の胸に押し付けてきた。後で開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものである。

先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で一人本を読んでいた少年は、気付くと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂い。今日は素敵なクリスマスになった」

6年生で先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に1枚のカードが届いた。

「先生はお母さんのようです。そして今まで出会った中で一番素晴らしい先生でした」

それから6年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担任をしてもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができました」

10年を経て、またカードが来た。そこには先生と出会えたことへの感謝と、父親に暴力をふるわれた経験があるから患者の痛みがわかる医者になれると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。あのままだとダメになってしまう僕を救ってくれた先生を神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって、最高の先生は、5年生の時に担任して下さった先生です」

そして1年後。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」と1行書き添えられていた。